

宮崎方言の動向

—方言の世代差と方言意識—

岸江信介

1. はじめに

宮崎方言の変化についてその動向を探るために、宮崎市及び近郊で世代別の方言調査を実施した。ここでは、この調査を通じて明らかとなった宮崎方言（及び方言意識）の変化について触れることにしたい。なお、ここでいう方言の変化とは、いわゆる「見かけ上の変化」を指す。すなわち、「見かけ上の変化」とは、一地域方言にみられる「実時間の変化」ではなく、同一時間上に認められる世代差に基づく方言（または方言意識）の差をいう。

以下では、調査項目のうちから特に世代差が顕著にあらわれたものをいくつかピックアップし、宮崎方言にみられる新語・新旧交替・衰退に注目することにした。

また、方言の変化の要因について探るために、方言形式（新語・伝統方言）と方言に対する意識（東京や関西、そして地元のことばに対する好感度など）相関関係についてもすこし触れたいと思う。

2. 調査概要

調査方法として、宮崎市及び近郊の高校生から壮年層に至る生え抜きの方々、約319名に対して、アンケート調査を実施した。この調査は、宮崎NHK放送局が「宮崎の若者ことば」の特集を企画したことが発端となり、これに便乗して行った。調査期間は、1996年3月1日～3月10日の約10日間、宮崎市内の高校、NHKカルチャーセンター受講生、宮崎県庁職員、宮崎県清武農協職員の方々を対象にし、「宮崎方言の使用と意識に関する調査票」を配布・回収するという方法を採用した。

回収した調査票を便宜的に壮年層・中年層・若年層・高年層の4世代に区分した。

各世代の区分は、以下の通りである。

- ①壮年層 昭和20年以前に生まれた人
- ②中年層 昭和21年～昭和39年生まれた人
- ③若年層 昭和40年～昭和52年生まれた人
- ④高校生 昭和53年～昭和55年生まれた人

但し、③若年層の世代は、男女其他の世代に比べねサンプル数が少ないので、集計時には、④高校生の世代と合わせてパーセンテージを出すことが多かった。その際、グラフには、③若年層には④高校生のサンプルを含んでいることを断っておきたい。

調査項目は、方言意識・方言に対する意見・方言形式等について、26項目を設定した。方言意識・方言に対する意見では、東京のことば・関西のことば（京都・大阪のことば）・地元のことば（宮崎

弁)に対する好き嫌い、宮崎弁ベスト3、方言衰退に対する意見などについて聞いた。方言形式では、伝統方言と新方言についての項目を含め、それぞれ使用・理解の有無の観点から選択肢を設けた。

3. 宮崎方言にみられる新語・新形式

新語・新形式の発生のパターンには、いくつかのケースが考えられる。

新語・新形式のうちには、①地元で発生したものと②外部から影響されたものがある。また、③その両者のにずれとも判定し難いものもある。更に、地元で発生したものの中には、旧形式のものから直接変化してきたもの(①-1)、旧形式とは直接関係なく発生したもの(①-2)が認められる。他所(東京など)からもたらされたものの中には、他所で用いられている形式をそのまま使用するようになったもの(②-1)と他所からもたらされた際に地元のことばとの接触で変換作用が生じ、変形した形で定着したもの(②-2)などが考えられる。

①地元で発生したもの

①-1 旧形式から直接したもの

地元で従来から用いられてきた旧形式(及びその意味)が独自に変化・発生したケースである。図1は「雨が降るんじゃない?」という場合に、○アメフル コッセン と用いられる新形式のコッセンの使用率を世代別にまとめたものである。若年層では、この形式の使用率が非常に高い反面、中・コッセンを使用するか

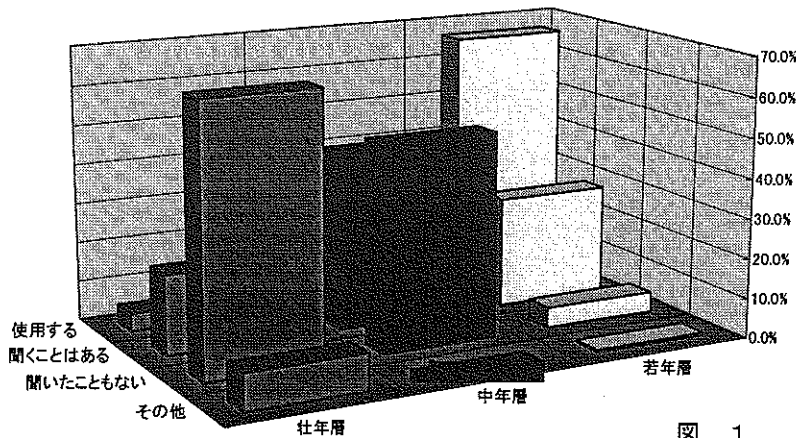


図 1

壮年層ではほとんどこの形式の使用が認められなかった。20代後半から使用が極端に少なくなるため、この形式が最近使われだしたものであることが分かる。恐らく発生してから10年も経過していないものと思われる。現在、小学生も含めて高校生以下の世代では、この形式を宮崎市を中心として多用している。また、中・壮年層では、この形式の代わりに～コトアラセン、～コトナイ(いずれも「～じゃない」という意味)といった形式を用いており、～コッセンはこれらの形式から発生したものと思われる。

図2-1・図2-2も、旧形式からの変化であるが、形式そのものの変化というよりも意味が大きく変化したケースである。旧形式のテゲ、テゲニャ、テゲテゲが原形である「大概」に近い「だいたい・

テゲを「非常に」の意味で使うか

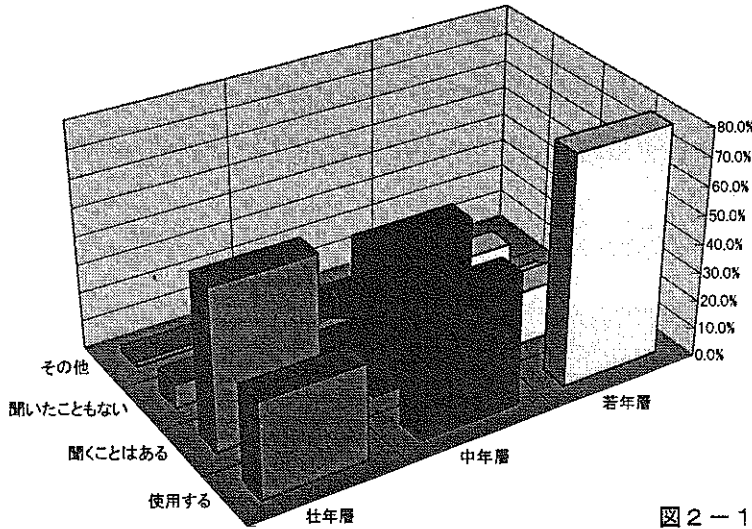


図2-1

テゲを「だいたい・おおよそ」の意味で使うか

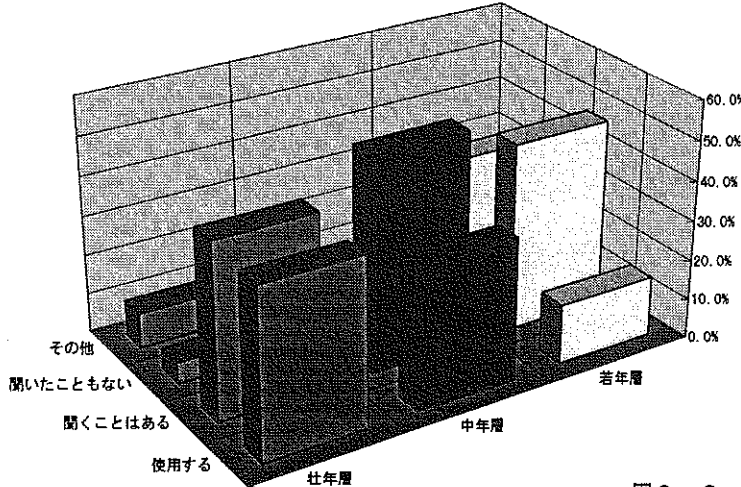


図2-2

おおよそ」の意味で用いるのに対し、新形式ではテゲニャ、テゲテゲという形式が用いられず、専らテゲで「非常に・大変」の意味を表す。図2-1は、テゲを「非常に」の意味で使うかどうかを聞いた結果である。若年層になるにつれて使用率が増す。一方、図2-2は、テゲを「だいたい・おおよそ」の意味で使うかどうかを聞いた結果である。図2-1とは対照的に壮年層での使用率が高く、若年層で低くなっている。この両方のグラフから、宮崎では、テゲの意味が「だいたい・おおよそ」から「非常に」変化していることが明かとなった。

①-2 旧形式とは関係なく発生したもの

当方言の旧形式には、関連が薄い形式が発生する場合は多いと考えられる。ここでは、この代表として、例えば「きれいな花だよ」という場合の「花ヤジ(一)」という形式についてみることにしたい。

花ヤジを使うか

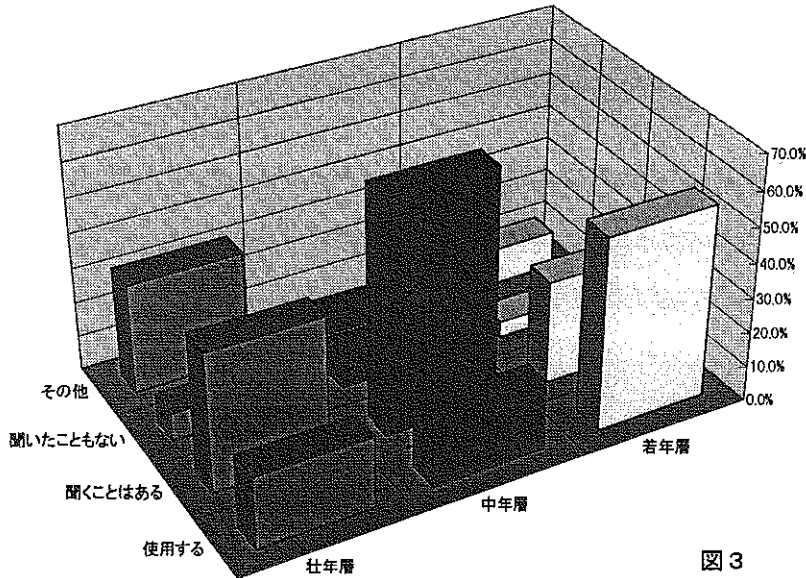


図3

この形式も新形式としての特徴がグラフに反映されている。すなわち、若年層の使用率が高く、中・壮年層での比率が低くなっている。この形式は、宮崎では少なくとも、先の～コッセン・テゲ（「非常に」の意味）と並んで若者ことばの代表的存在となっている。～ジそのものが若者の、いわば新出の文末詞であるため、以下にみる断定の助動詞「ヤ・ジャ」の、ジャとの連接（ジャジ）が稀である点も興味深いところである。なお、「その他」が壮年層に多いのは、この形式の代わりに「花ジャ」・「花ヤネ」・「花ツガ」・「花ヨ」等が用いられるからである。～ヤジに対応する旧形式は、見当たらない。

②外部からの影響

②-1 他所からもたらされたもの

他所からもたらされたものの中で最も多いと思われるものは、全国共通語であろうが、ここでは共通語とは異なる非標準形式についてみることにする。東京を中心に全国的に若者の間で猛威をふるう「チョー（たいへん・非常に）」が宮崎でも若年世代に受容されている。宮崎では、前出のテゲがよく用いられるにもかかわらず、同時に外からの形式も受け入れているのである。思うに、若者世代ではこの「たいへん・非常に」を意味する形式が全国的に若者語の代表的存在となっており、東京のチョー、大阪のメッチャをはじめとして、九州地方でも、福岡のブチ、ペチャ、熊本のタイガ等が各地に認められる。図4には、宮崎で回答を得た「非常に」を意味する形式を掲げた。全年層とも、先のテゲが有力であるが、高校生のチョーの使用が目立っているのは、いち早く東京の形式を受け入れて

いるのであろう。

「非常に大きい」という場合の「非常に」をどう言うか

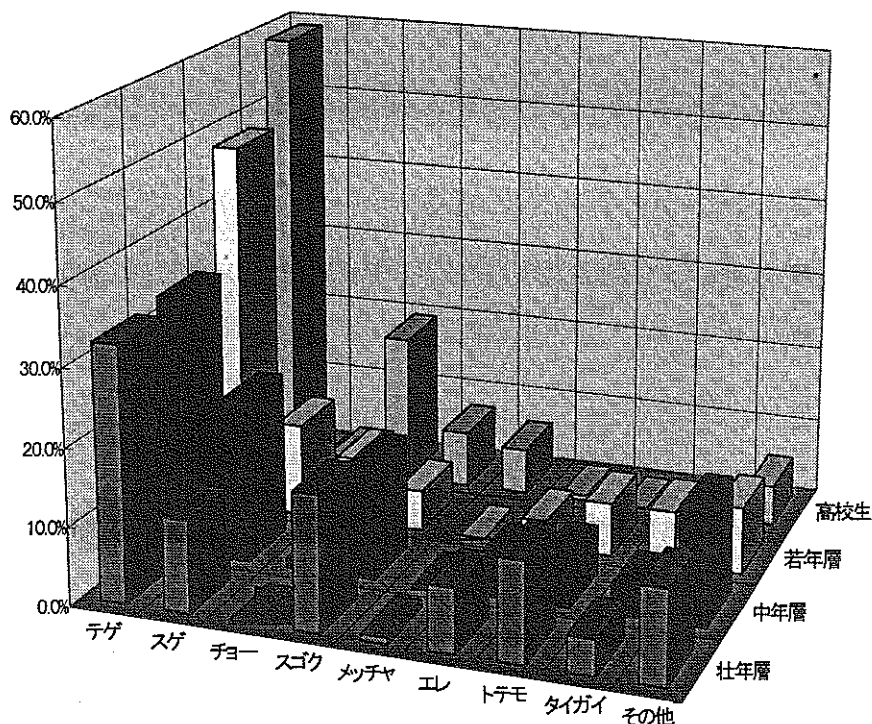


図4

②-2 他所からもたらされたものと接触、変形したもの

西日本の各地で若年世代に定着した方言形式として、例えば、「行かなかった」を意味するイカンカッタは、西日本の「イカン（行かない）」の素地に、東の～カッタが付いて生まれたものである。単なる共通語化ならイカナカッタを受容するはずだったが、地元方言との接触によって変換作用を受けた。このような変換作用は各地で認められるに違いない。また、変換作用にもいろいろなケースがあるであろう（陣内正敬「北部九州における方言新語研究」参照）。

実は、これらの形式は共通語に似ているにもかかわらず、共通語と当地の方言との変換作用の結果生じた形式であると考えられる。すなわち、宮崎方言では、あいづ宮崎では、あいづちを打つ時にデスヨ、デスガ、デスデスという形式を多用する。あいづちを打つ際に、ジャ、ジャーヨ、ジャガ、ジャガジャガ等を用い、ソージャ、ソージャガ等といった形式を通常用いない。これが共通語「そうです」と接触した折に、デスヨ、デスガ、デスデスという形式に変換したとみられる。木部暢子氏によると、鹿児島方言において「旧来の方言の相槌にジャッドがあるが、これを共通語に訳したのがデスヨである。」（「方言から『からいも普通語』へ」月刊「言語」95、11別冊『変容する日本語の方言』所収による）として、この形式が鹿児島にもあることを指摘し、共通語に訳したものとしている。これらは、新語というよりは、少し古い時期に生じた変換なのであろう。図5-1、図5-2

を参照、比較願いたい。

「デスガ・デスヨ」を使うか

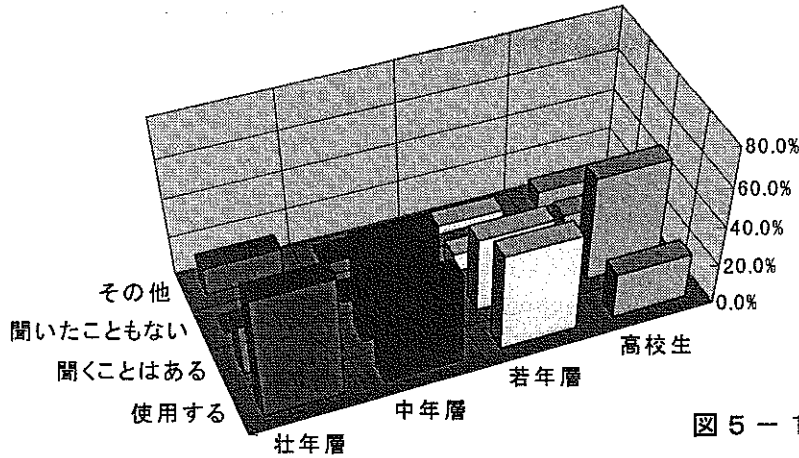


図 5 - 1

「ジャガ・ジャガジャガ」を使うか

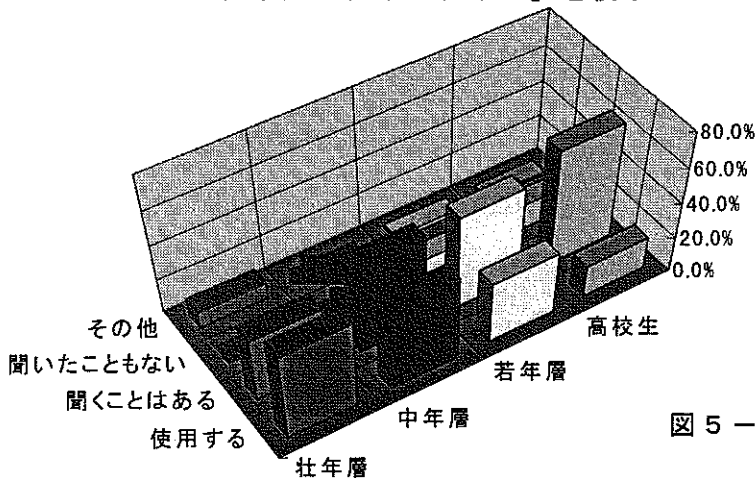


図 5 - 2

③両者のいずれとも判定し難いもの

(地元で発生したものか他所からもたらされたものか)

宮崎方言では、断定の助動詞の形式がジャからヤへ変化してきており、この変化は現在進行中である。この場合、地元で発生したものか他所からもたらされたものか明らかでないとするのは、このケースに限って、例えば、関西から移入されたとみるのは、やや不自然な感があるからである（もしヤが関西中央部からもたらされたものだとすれば他にもいくつか事例があるはずであるが）。ただ、今から約25年前の調査結果（九州方言研究会『九州方言の基礎的研究』1969）において、老年層でわずかに福岡・長崎・鹿児島にみられたヤが、少年層ではこれらの県でジャをすでに凌駕して優位に立った。また、同時に少年層図では、ヤかほぼ九州全県（宮崎県でもこの当時、鹿児島寄り2地点にヤが認められた）に認められた。このことから九州地方のヤは、九州の北と南から広がりはじめ、

現在では九州全域で若年層主流形式となり、宮崎でも、若年層で最も有力な形式となった。したがって、宮崎のヤは、関西中央部からの直輸入ではないにしても、近県（鹿児島）からもたらされた可能性が大である。ジャからヤへほぼ時を同じゅうして、九州各地で別個に発生したとは考えにくい。恐らく福岡を起点として、まず、長崎と鹿児島へ広がり、その後、全域にひろまったのであろう。図6-1・図6-2・図6-3は、いずれもヤ・ジャに関する宮崎での調査結果である。ジャからヤへの変化をどの図からもみることができる。

「明日は雨だろう」という場合の「だろう」をどう言うか

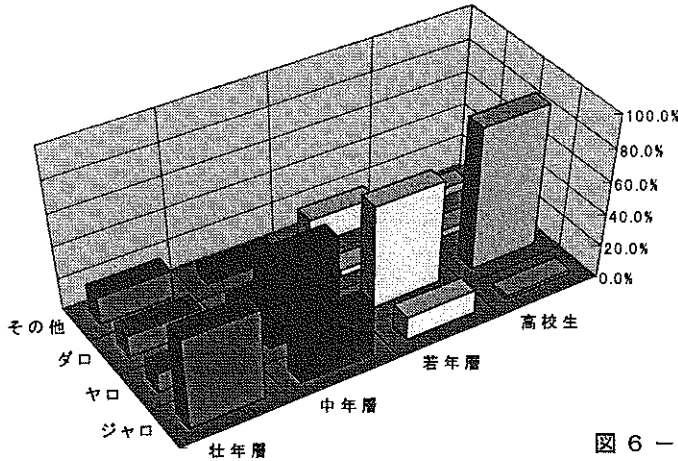


図 6 - 1

「そこにあるじゃないか」という場合の「あるじゃないか」を言うか

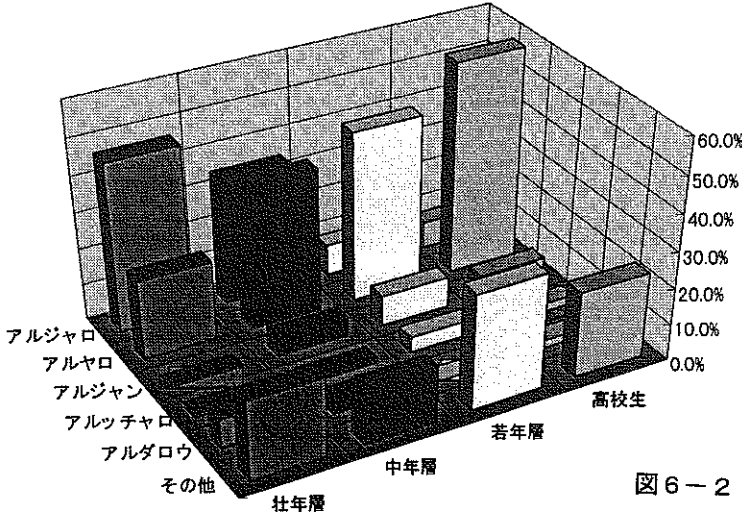


図 6 - 2

「昨日は雨だった」という場合の「だった」をどう言うか

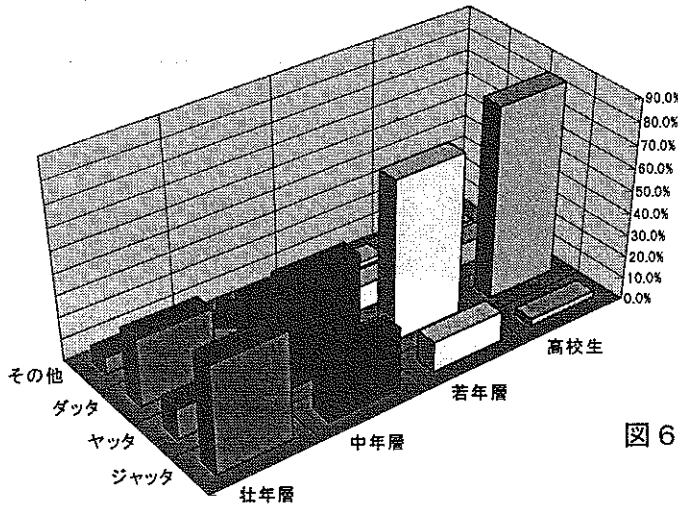


図 6 - 3

さて、残された問題は、九州北部あたりのヤが、この地方で独自にジャからヤへと変化したのか、それとも関西中央部からもたらされたかという部分である。一般的にジャの響きに比べてより柔らかい響きを持つと思われるヤに移行しようとする意図は、関西中央部とは無関係に九州北部あたりでも特に若い女性に起こり得たことが想像できるし、決して蓋然性が少なかったわけでもなかったことと思われる。福岡あたりでこの変化が発生したのだろうか。ただ最近、非常に興味深い資料に接した。陣内正敬・坪内在智世両氏によると、福岡では、世代が下がるほど、関西や関西弁に対する評価が上昇している（表1）という指摘である（「地元意識と開放性の共存する都市方言」月刊「言語」95. 11別冊『変容する日本語の方言』所収）。

表1：博多弁ネイティブの関西、関西弁に対する評価（%）

年層	関 西			関 西 弁		
	好き	嫌い	どちらでもない	好き	嫌い	どちらでもない
高年層50人(60歳～)	16.6	28.6	54.8	14.2	38.1	47.7
活躍層50人(25～40歳)	29.4	52.3	18.3	38.7	50.0	11.3
高校生50人(16～18歳)	60.0	20.0	20.0	48.0	22.0	30.0
全 体	35.3	33.6	31.0	33.6	36.7	29.7

陣内正敬・坪内佐智世「地元意識と開放性の共存する都市方言」より抜粋

今回の宮崎の調査においても、この点を確かめることができた（図7）。宮崎でも壮年層では、関西弁よりも東京弁に対する好感度が高かったのであるが、これに反して若年層では、関西弁に対する好感度が圧倒的に高いということが判明した（表2）。なお、カイ2乗検定（好感度、東京VS大阪×世代）は統計的に有意であった。 $\chi^2 = 41.98, P < .01$ 。

東京弁・関西弁に対する好感度

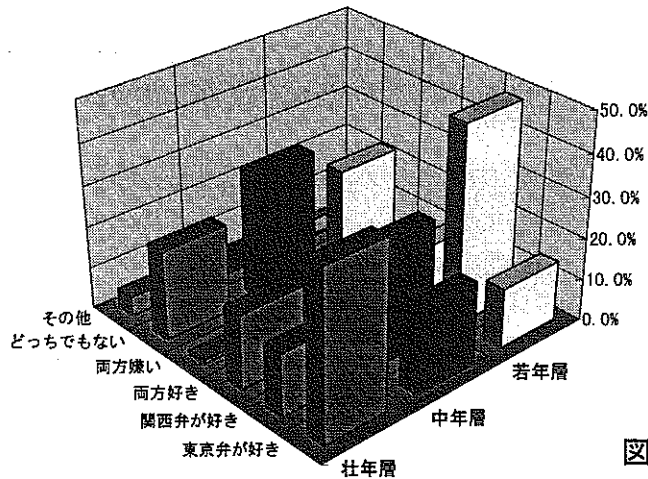


図 7

表 2：東京弁・関西弁に対する好感度

世代 \ 指向方言	若年層	中年層	壮年層
東京弁	18	14	39
関西弁	64	34	12

枠内の数字は回答者数。

東京弁・関西弁への志向度は、世代によって異なることがこの結果、少なくとも宮崎では明らかとなった。

この事実は、宮崎に限らず、恐らく福岡でも、また九州全体の傾向のように思われる。各々10数名程度にしか聞いていないが、熊本や鹿児島出身の大学生にもこの傾向が強いことが判明した。もし今後、この傾向が強まるとするならば、言語面で若年層の関西志向は、より強くなっていくことになると思われる。

4. 方言使用と方言意識

地元の方言に対して強い愛着をもつ人もいれば、方言はあまり好きではないという人もいる。また、同じ地域にありながらも常に方言を用いて話す人とあまり方言を用いようとはしない人、千差万別である。方言に愛着を持っている人は方言を日ごろよく用いるのか、あるいは方言をあまり好きでない人は普段方言をあまり用いないのであろうか、素朴な疑問をもってみた。

宮崎方言の世代別調査の項目群の中に設けた(1)「世代を超えて用いられる地域方言(換言すると、主に老年層に用いられる伝統方言とは異なり、全世代を通して用いられる方言)」、(2)「新語・新形式と認められる地域方言」それぞれ(1)・(2)の項目と、「宮崎地元方言に対する好感度」との相

関関係をみることにした。また、同時にこれらの地域方言の使用と年齢との相関関係をも同時にみることにした。以下に各調査項目を示した。

宮崎方言使用の調査表

- | | |
|-----|---|
| 1. | 「マコチ・マコツ」(本当に・誠にの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 2. | 「ヨダキー」(いやだ・したくないの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 3. | 「ソング」(そんな・そうの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 4. | 「今日は雨じゃカイやめた」(からの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 5. | 「その本は読ミキラン」(読めないの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 6. | 「ヤペー」(やばいの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 7. | 「ダセー」(ださいの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 8. | 「テグ大きい」(大変・すごくの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 9. | 「チョー」(大変・すごくの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |
| 10. | 「降るコッセン」(降るンジャナイの意味)を使いますか。 |
| | 1 使用する 2 聞くことはあるが使用しない 3 聞いたこともない |

以上の選択肢にそれぞれ得点を与えた。「1. 使用する」を答えた場合は3点、「2. 聞くことはあるが使用しない」を選んだ場合は2点、「3. 聞いたこともない」を選んだ場合は1点。方言に対する好感度は、次の1項目で測定した。

「あなたはこの地域の方言が好きですか」

1. 大好き
2. 好き
3. どちらかというが好き
4. 好きでも嫌いでもない
5. あまり好きではない
6. 嫌い
7. 大嫌い

以上の選択肢にもそれぞれ得点を与えた。「1. 大好き」を答えた人には7点、「2. 好き」を選んだ人は6点、「3. どちらかというが好き」を選んだ人は5点、以下同様に、

「7. 大嫌い」を選んだ人が1点。ここでは、得点が高いほど、方言に対する好感度が高いということになる。

以上、相関関係についてSPSSを用い、得られた結果を表3に示す。表のタイトルの汎世代方言とは、世代を超えて用いられる地域方言。項目としては、2, 3, 4, 5の4項目を世代を超えて用いられる地域方言と認定して選んだ。これらの項目群は、どの世代でもよく用いられ、その使用に世代差がないことが予め分かっていた。若年方言とは、新語・新形式として認められる地域方言である。項目としては、6, 7, 8, 9, 10の5項目である。

表3：汎世代方言・若年方言と好感度

	汎世代方言	若年方言
好感度	. 30 (注)	-. 01
年齢	-. 10	-. 79 (注)

(注) $P < .001$, $n = 291 \sim 295$ 。

まず、汎世代方言と好感度との相関は、有意で ($r = -.3$)、強い相関を示した。すなわち、どの世代でもよく使われる方言(2, 3, 4, 5)は、この地域の方言が好きか嫌いかということと相関関係があり、どの世代でもよく使われる方言をよく用いる人ほど、この地域の方言が好きだということになった。一方、若年方言、すなわち、新語・新形式の使用度と好感度との間には、相関が認められなかった。つまり、この地域の方言が好きか嫌いかということは、新語・新形式の使用度と相関がないということである。汎世代方言と年齢の関係はどうか、ここには、当然、相関が認められなかった。汎世代方言では、世代を超えて用いられる方言を選んでいるからである。

一方、若年方言には、当然のことではあるが、年齢との間に相関があるという結果となった ($r = -.79$, $P < .001$)。

5. おわりに

宮崎市及びその周辺の地域において行った方言世代別調査結果の一部を紹介した。特に若者世代が中心に用いる新語・新形式、さらに世代を超えて用いられる方言の動向や意識についてみてきた。

今回の結果では、地元で発生する方言とは別に東京や関西からもたらされる新語・新形式と東京・関西に対する志向度とをごく大雑把に取り扱ったに過ぎず、言語意識とは別の、文化的な要素も志向度をみる際の目安に置く必要があった。こうすることによって、更に都会に対する志向(例えば、あこがれなど)が確認される可能性も出てくると思われるからである。

謝辞

統計的手法およびそのデータの判断等、宮崎国際大学の三宅邦建氏(社会心理学)に便宜をはかって頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。

参考文献

1. 九州方言学会刊(1969)「九州方言の基礎的研究」・風間書房
2. 真田信治(1991)「社会言語学からみた言語変化」『日本語学』第十一卷八号・明治書院
3. 吉岡泰夫(1992)「九州方言の現在」『日本語学』第十一卷八号・明治書院
4. 木部暢子(1995)「方言から『からいも普通語』へ」『言語』95・11別冊・大修館書店
5. 陣内正敬・坪内佐智世(1995)「地元意識と開放性の共存する都市方言」『言語』95・11別冊・大修館書店
6. 陣内正敬(1996)「北部九州における方言新語研究」・九州大学出版
7. 村上敬一(1996)「熊本都市圏における若年層方言の動態」第59回変異理論研究発表資料